



CHAPTER 17

システム メッセージ ログイング

このマニュアルでは、Cisco Wireless Mobile Interface Card (WMIC; ワイヤレス モバイル インターフェイス カード) でシステム メッセージ ログイングを設定する方法について説明します。



(注) この章で使用するコマンドの構文および使用方法の詳細については、『Cisco IOS Configuration Fundamentals Command Reference for Release 12.2』を参照してください。

このマニュアルの構成は次のとおりです。

- 「システム メッセージ ログイングの概要」 (P.17-1)
- 「システム メッセージ ログイングの設定」 (P.17-2)
- 「ログイング設定の表示」 (P.17-12)

システム メッセージ ログイングの概要

デフォルトでは、装置はシステム メッセージおよび **debug** イネーブル EXEC コマンドの出力をログイング プロセスに送信します。ログイング プロセスはログイング バッファ、端末回線、UNIX Syslog サーバなど、さまざまな宛先へのログイング メッセージの配布をコンフィギュレーションに基づいて制御します。このプロセスはコンソールへもメッセージを送信します。



(注) Syslog の形式は、4.3 BSD UNIX に準拠しています。

ログイング プロセスをディセーブルにすると、メッセージはコンソールだけに送信されます。メッセージは生成されるたびに送信されるので、メッセージおよびデバッグ出力は他のコマンドのプロンプトや出力の間に組み入れられます。メッセージを生成したプロセスが完了したあとで、コンソールにメッセージが表示されます。

メッセージの重大度を設定すると、コンソールおよび各宛先に出力されるメッセージのタイプを制御できます。ログ メッセージにタイムスタンプを組み込んだり、Syslog の送信元アドレスを設定したりすることによって、リアルタイムのデバッグおよび管理を強化できます。

記録されたシステム メッセージにアクセスするには、CLI (コマンドライン インターフェイス) を使用するか、または適切に設定された Syslog サーバにシステム メッセージを保存します。装置は内部バッファに Syslog メッセージを保存します。Telnet を介して WMIC にアクセスするか、または Syslog サーバ上のログを表示することによって、離れた場所でシステム メッセージをモニタできます。

システム メッセージ ログの設定

ここでは、システム メッセージ ログを設定する方法について説明します。設定情報の説明は、次のとおりです。

- 「システム ログ メッセージの形式」(P.17-2)
- 「システム メッセージ ログのデフォルト設定」(P.17-4)
- 「メッセージ ログのディセーブル化およびイネーブル化」(P.17-4)
- 「メッセージ出力先デバイスの設定」(P.17-5)
- 「ログ メッセージ タイムスタンプのイネーブル化およびディセーブル化」(P.17-6)
- 「ログ メッセージのシーケンス番号のイネーブル化およびディセーブル化」(P.17-7)
- 「メッセージ重大度の定義」(P.17-7)
- 「ヒストリ テーブルおよび SNMP に送信する Syslog メッセージの制限」(P.17-9)
- 「ログ レート制限の設定」(P.17-10)
- 「UNIX Syslog サーバの設定」(P.17-10)

システム ログ メッセージの形式

システム ログ メッセージには最大 80 文字とパーセント記号 (%) を 1 つ含めることができます。このパーセント記号は、任意のシーケンス番号またはタイムスタンプ情報が設定されている場合、その後に配置します。メッセージは次の形式で表示されます。

```
seq no:timestamp: %facility-severity-MNEMONIC:description
```

パーセント記号の前のメッセージ部分は、グローバル コンフィギュレーション コマンドの **service sequence-numbers**、**service timestamps log datetime**、**service timestamps log datetime [localtime] [msec] [show-timezone]**、または **service timestamps log uptime** によって決まります。

表 17-1 で、Syslog メッセージの要素について説明します。

表 17-1 システム ログ メッセージの要素

要素	説明
<i>seq no:</i>	service sequence-numbers グローバル コンフィギュレーション コマンドが設定されている場合に限り、ログ メッセージにシーケンス番号が組み込まれます。 詳細については、「ログ メッセージのシーケンス番号のイネーブル化およびディセーブル化」(P.17-7) を参照してください。
<i>timestamp</i> の形式： <i>mm/dd hh:mm:ss</i> または <i>hh:mm:ss</i> (短期間の稼働) または <i>d h</i> (長期間の稼働)	メッセージまたはイベントの日付と時刻。この情報が表示されるのは、 service timestamps log [datetime log] グローバル コンフィギュレーション コマンドが設定されている場合だけです。 詳細については、「ログ メッセージ タイムスタンプのイネーブル化およびディセーブル化」(P.17-6) を参照してください。

表 17-1 システム ログ メッセージの要素 (続き)

要素	説明
<i>facility</i>	メッセージが参照するファシリティ (SNMP、SYS など)。ファシリティはハードウェア デバイス、プロトコル、またはシステム ソフトウェアのモジュールになります。システム メッセージの送信元または原因を表します。
<i>severity</i>	メッセージの重大度を表す 0 ~ 7 の 1 桁のコード。重大度については、表 17-3 (P.17-8) を参照してください。
<i>MNEMONIC</i>	固有のメッセージとして記述するテキスト スtring。
<i>description</i>	伝えられているイベントの詳細情報を示すテキスト スtring。

システム メッセージの一部の例を示します。

```

Syslog logging: enabled (0 messages dropped, 3 messages rate-limited, 0 flushes,
 0 overruns, xml disabled)
  Console logging: level debugging, 74 messages logged, xml disabled
  Monitor logging: level debugging, 0 messages logged, xml disabled
  Buffer logging: level debugging, 76 messages logged, xml disabled
  Logging Exception size (4096 bytes)
  Count and timestamp logging messages: disabled
  Trap logging: level informational, 78 message lines logged
Log Buffer (4096 bytes):
CHANGED: Interface Dot11Radio0, changed state to reset
*Mar  1 17:02:19.618: %LINK-3-UPDOWN: Interface Dot11Radio0, changed state to up
*Mar  1 17:14:21.520: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by Cisco on vty0
(10.0.0.42)
*Mar  1 17:36:33.519: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by Cisco on vty0
(10.0.0.42)
*Mar  1 17:56:48.596: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by Cisco on vty0
(10.0.0.42)
*Mar  1 18:12:01.670: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by Cisco on vty0
(10.0.0.42)
*Mar  1 19:35:39.710: %LINK-5-CHANGED: Interface Dot11Radio0, changed state to r
  eset
*Mar  1 19:35:39.718: %LINK-3-UPDOWN: Interface Dot11Radio0, changed state to up
*Mar  1 20:52:06.007: %LINK-3-UPDOWN: Interface Dot11Radio0, changed state to do
  wn
*Mar  1 20:52:06.022: %LINK-5-CHANGED: Interface Dot11Radio0, changed state to r
  eset
*Mar  1 20:52:06.035: %LINK-3-UPDOWN: Interface Dot11Radio0, changed state to up
*Mar  1 23:47:38.851: %DOT11-6-ASSOC: Interface Dot11Radio0, Station 0002.8a29.
  82e8 Associated KEY_MGMT[NONE]
*Mar  1 23:48:16.986: %DOT11-6-DISASSOC: Interface Dot11Radio0, Deauthenticating
  Station 0002.8a29.82e8 Reason: Previous authentication no longer valid

```

システム メッセージ ログイングのデフォルト設定

表 17-2 に、システム メッセージ ログイングのデフォルト設定を示します。

表 17-2 システム メッセージ ログイングのデフォルト設定

機能	デフォルトの設定
コンソールへのシステム メッセージ ログイング	イネーブル
コンソールの重大度	デバッグ (およびより低い数値のレベル、表 17-3 (P.17-8) を参照)
ログイング バッファ サイズ	4096 バイト
ログイング ヒストリ サイズ	1 メッセージ
タイムスタンプ	ディセーブル
同期ログイング	ディセーブル
ログイング サーバ	ディセーブル
Syslog サーバの IP アドレス	未設定
サーバ ファシリティ	Local7 (表 17-4 (P.17-12) を参照)
サーバの重大度	通知 (およびより低い数値のレベル、表 17-3 (P.17-8) を参照)

メッセージ ログイングのディセーブル化およびイネーブル化

メッセージ ログイングはデフォルトでイネーブルになっています。コンソール以外の宛先にメッセージを送信するには、イネーブルに設定する必要があります。イネーブルの場合、ログ メッセージはログイング プロセスに送信され、メッセージを生成したプロセスとは非同期で、指定の保管場所にメッセージが記録されます。

メッセージ ログイングをディセーブルにするには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	no logging on	メッセージ ログイングをディセーブルにします。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show running-config または show logging	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

ログイング プロセスをディセーブルにすると、プロセスはメッセージがコンソールに書き込まれるまで待つてから処理を続けなければならないので、WMIC の処理速度が低下する可能性があります。ログイング プロセスがディセーブルの場合、メッセージは生成されると同時にコンソールに表示されます。コマンド出力の途中に示されることもよくあります。

logging synchronous グローバル コンフィギュレーション コマンドも、コンソールのメッセージ表示に影響します。このコマンドがイネーブルの場合、メッセージは Return キーを押して初めて表示されます。詳細については、「[ログ メッセージ タイムスタンプのイネーブル化およびディセーブル化](#) (P.17-6) を参照してください。

ディセーブルになっていたメッセージ ログイングをもう一度イネーブルにするには、**logging on** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

メッセージ出力先デバイスの設定

メッセージ ログイングをイネーブルにすると、コンソールのほかにも特定の場所にメッセージを送信できます。メッセージの受信箇所を指定するには、イネーブル EXEC モードで次のコマンドのうち 1 つ以上を使用します。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	logging buffered [size] [level]	内部バッファにメッセージを記録します。デフォルトのバッファ サイズは 4096 です。範囲は 4096 ~ 2147483647 バイトです。レベルは 0 (emergencies)、1 (alerts)、2 (critical)、3 (errors)、4 (warnings)、5 (notifications)、6 (informational)、および 7 (debugging) です。 (注) WMIC が他のタスクのメモリまで使い果たす可能性があるため、バッファ サイズをあまり大きくしないでください。 show memory イネーブル EXEC コマンドを使用すると、WMIC 上の空きプロセッサ メモリを調べることができます。ただし、これは使用できる最大値なので、この値にバッファ サイズを設定しないでください。
ステップ 3	logging host	UNIX Syslog サーバ ホストにメッセージを記録します。 <i>host</i> には、Syslog サーバとして使用するホストの名前または IP アドレスを指定します。 ログイング メッセージを受信する Syslog サーバのリストを作成するには、このコマンドを繰り返し入力します。 Syslog サーバの詳細な設定手順については、「 UNIX Syslog サーバの設定 」(P.17-10) を参照してください。
ステップ 4	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	terminal monitor	現在のセッションの間、コンソール以外の端末にメッセージを記録します。 端末パラメータ設定コマンドはローカルな設定であり、セッションの終了後は無効になります。デバッグ メッセージを確認するには、セッションごとにこの手順を実行する必要があります。
ステップ 6	show running-config	設定を確認します。
ステップ 7	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

logging buffered グローバル コンフィギュレーション コマンドによって、ログイング メッセージが内部バッファにコピーされます。バッファは循環型なので、バッファが満杯になると、新しいメッセージで古いメッセージが上書きされます。バッファに記録されたメッセージを表示するには、**show logging** イネーブル EXEC コマンドを使用します。表示される最初のメッセージは、バッファ内で最も古いメッセージです。バッファの内容を消去するには、**clear logging** イネーブル EXEC コマンドを使用します。

コンソールへのログイングをディセーブルにするには、**no logging console** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。ファイルへのログイングをディセーブルにするには、**no logging file [severity-level-number | type]** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

ログ メッセージ タイムスタンプのイネーブル化およびディセーブル化

デフォルトでは、メッセージにタイムスタンプは組み込まれません。

ログ メッセージのタイムスタンプをイネーブルにするには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	service timestamps log uptime または service timestamps log datetime [msec] [localtime] [show-timezone]	ログのタイムスタンプをイネーブルにします。 最初のコマンドを使用すると、ログ メッセージのタイムスタンプがイネーブルになり、システム再起動以後の時間が示されます。 2 番目のコマンドを使用すると、ログ メッセージのタイムスタンプがイネーブルになります。選択したオプションによっては、ローカル タイムゾーンに基づいた日付と時刻がミリ秒単位で示され、さらにタイムゾーン名を含めることができます。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show running-config	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

デバッグとログ メッセージの両方について、タイムスタンプをディセーブルにするには、**no service timestamps** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

service timestamps log datetime グローバル コンフィギュレーション コマンドをイネーブルにした場合の、ログイング出力 (部分) の例を示します。

```
*Mar 1 18:46:11: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
```

service timestamps log uptime グローバル コンフィギュレーション コマンドをイネーブルにした場合の、ログイング出力 (部分) の例を示します。

```
00:00:46: %LINK-3-UPDOWN: Interface Port-channel1, changed state to up
```

ログ メッセージのシーケンス番号のイネーブル化およびディセーブル化

同じタイムスタンプで複数のログ メッセージが生成される可能性があるため、特定のメッセージを確実に参照するために、メッセージをシーケンス番号とともに表示されるようにすることができます。デフォルトでは、ログ メッセージにシーケンス番号は示されません。

ログ メッセージのシーケンス番号をイネーブルにするには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	service sequence-numbers	シーケンス番号をイネーブルにします。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	show running-config	設定を確認します。
ステップ 5	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

シーケンス番号をディセーブルにするには、**no service sequence-numbers** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

シーケンス番号をイネーブルにした場合の、ログイング出力 (部分) の例を示します。

```
000019: %SYS-5-CONFIG_I: Configured from console by vty2 (10.34.195.36)
```

メッセージ重大度の定義

メッセージの重大度 (表 17-3 を参照) を指定することによって、特定の装置に出力するメッセージを制限できます。

メッセージの重大度を定義するには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	logging console level	コンソールに記録するメッセージを制限します。 デフォルトでは、デバッグ メッセージおよびより低い数値のレベル (表 17-3 (P.17-8) を参照) のメッセージがコンソールに出力されます。
ステップ 3	logging monitor level	端末回線に記録するメッセージを制限します。 デフォルトでは、デバッグ メッセージおよびより低い数値のレベル (表 17-3 (P.17-8) を参照) のメッセージが端末に送信されます。
ステップ 4	logging trap level	Syslog サーバに記録するメッセージを制限します。 デフォルトでは、通知メッセージおよびより低い数値のレベル (表 17-3 (P.17-8) を参照) のメッセージが Syslog サーバに送信されます。 Syslog サーバの詳細な設定手順については、「UNIX Syslog サーバの設定」(P.17-10) を参照してください。
ステップ 5	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。

	コマンド	目的
ステップ 6	<code>show running-config</code> または <code>show logging</code>	設定を確認します。
ステップ 7	<code>copy running-config startup-config</code>	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。



(注) `level` を指定すると、そのレベルおよびより低い数値のレベルのメッセージが宛先に出力されます。

コンソールへのログイングをディセーブルにするには、**no logging console** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。コンソール以外の端末へのログイングをディセーブルにするには、**no logging monitor** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。**Syslog** サーバへのログイングをディセーブルにするには、**no logging trap** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

表 17-3 で、`level` キーワードについて説明します。最も重大度の高いレベルから順に、対応する UNIX の Syslog 定義も示します。

表 17-3 メッセージ ログイングの level キーワード

level キーワード	レベル	説明	syslog の定義
emergencies	0	システムが不安定	LOG_EMERG
alerts	1	ただちに対処が必要	LOG_ALERT
critical	2	クリティカル	LOG_CRIT
errors	3	エラー	LOG_ERR
warnings	4	警告	LOG_WARNING
notifications	5	正常だが注意を要する状態	LOG_NOTICE
informational	6	情報メッセージのみ	LOG_INFO
debugging	7	デバッグ メッセージ	LOG_DEBUG

ソフトウェアによって、そのほか 4 つのカテゴリのメッセージが生成されます。

- ソフトウェアまたはハードウェアの誤動作に関するエラー メッセージ。**warnings** から **emergencies** のレベルで表示されます。このタイプのメッセージは、WMIC の機能が影響を受けていることを意味します。
- debugging** レベルに表示される、**debug** コマンドからの出力 デバッグ コマンドを使用するのは通常、TAC のエンジニアだけです。
- インターフェイスのアップ/ダウン変化およびシステム再起動メッセージ。**notifications** レベルで表示されます。これは単なる情報メッセージなので、WMIC の機能に影響はありません。
- informational** レベルに表示される、リロード要求およびプロセスの不足しているスタック メッセージ これは単なる情報メッセージなので、WMIC の機能に影響はありません。

ヒストリ テーブルおよび SNMP に送信する Syslog メッセージの制限

snmp-server enable trap グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用することによって、SNMP Network Management Station (NMS; ネットワーク管理ステーション) に Syslog メッセージ トラップを送信できるようにすると、送信して WMIC のヒストリ テーブルに保管するメッセージのレベルを変更できます。ヒストリ テーブルに保管するメッセージ数も変更できます。

メッセージがヒストリ テーブルに保管されるのは、SNMP トラップが宛先に確実に到達するとは限らないためです。デフォルトでは、Syslog トラップがイネーブルになっていない場合も含めて、**warning** レベルとより低い数値のレベル (表 17-3 (P.17-8) を参照) のメッセージが 1 つ、ヒストリ テーブルに保管されます。

レベルおよびヒストリ テーブル サイズのデフォルトを変更するには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	logging history level¹	ヒストリ ファイルに保管し、SNMP サーバに送信する Syslog メッセージのデフォルト レベルを変更します。 <i>level</i> キーワードについては、表 17-3 (P.17-8) を参照してください。 デフォルトでは、 warnings 、 errors 、 critical 、 alerts 、および emergencies メッセージが送信されます。
ステップ 3	logging history size number	ヒストリ テーブルに保管できる Syslog メッセージの数を指定します。 デフォルトでは、1 メッセージが保管されます。範囲は 1 ~ 500 メッセージです。
ステップ 4	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 5	show running-config	設定を確認します。
ステップ 6	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

1. レベルのキーワードおよび重大度については、表 17-3 を参照してください。SNMP を使用する場合、重大度の値が 1 だけ大きくなります。たとえば、**emergencies** は 0 ではなく 1 になり、**critical** は 2 ではなく 3 になります。

ヒストリ テーブルが一杯になると (**logging history size** グローバル コンフィギュレーション コマンドで指定した最大メッセージ エントリ数に達すると)、新しいメッセージ エントリを保管できるように、最も古いメッセージ エントリが削除されます。

Syslog メッセージのログイングをデフォルトのレベルに戻すには、**no logging history** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。ヒストリ テーブルのメッセージ数をデフォルトのレベルに戻すには、**no logging history size** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

ログギング レート制限の設定

装置が 1 秒間に記録するメッセージ数に制限を設けることができます。すべてのメッセージまたはコンソールに送信されるメッセージへの制限を有効にすることができ、特定の重大度のメッセージが制限から除外されるように指定することもできます。

ログギング レート制限をイネーブルにするには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	logging rate-limit seconds [all console] [except severity]	秒単位のログギング レート制限をイネーブルにします。 <ul style="list-style-type: none"> （任意）制限の適用対象を、すべての記録にするか、コンソールに記録されるメッセージに限定するかを指定できます。 （任意）制限から特定の重大度を除外します。
ステップ 3	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 4	copy running-config startup-config	（任意）コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

レート制限をディセーブルにするには、**no logging rate-limit** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用します。

UNIX Syslog サーバの設定

ここでは、4.3 BSD UNIX サーバの Syslog デーモンを設定し、UNIX システムのログギング機能を定義する方法について説明します。

UNIX Syslog デーモンへのメッセージ ログギング

UNIX Syslog サーバにシステム ログ メッセージを送信するには、その前に、UNIX サーバ上で Syslog デーモンを設定する必要があります。root としてログインし、次の作業を行います。



(注)

新しいバージョンの UNIX Syslog デーモンの中には、ネットワークからのデフォルトの Syslog パケットを受け付けられないものがあります。この場合、UNIX の **man syslogd** コマンドを使用して、リモート Syslog メッセージ ログギングを可能にするために、Syslog のコマンドラインに対して追加または削除すべきオプションを決定します。

ステップ 1 次のような行を /etc/syslog.conf ファイルに追加します。

```
local7.debug /usr/adm/logs/cisco.log
```

local7 キーワードでは、使用するログギング ファシリティを指定します。ファシリティについては、表 17-4 (P.17-12) を参照してください。**debug** キーワードでは、Syslog レベルを指定します。重大度については、表 17-3 (P.17-8) を参照してください。Syslog デーモンは、このレベルまたはそれより重大なレベルのメッセージを次のフィールドで指定されたファイルに送信します。ファイルがすでに存在しており、syslog デーモンにこのファイルへの書き込みのアクセス権がある必要があります。

ステップ 2 UNIX シェル プロンプトに次のコマンドを入力し、ログ ファイルを作成します。

```
$ touch /usr/adm/log/cisco.log
$ chmod 666 /usr/adm/log/cisco.log
```

ステップ 3 次のコマンドを入力し、Syslog デーモンが新しい変更を確実に読み取るようにします。

```
$ kill -HUP `cat /etc/syslog.pid`
```

詳細については、UNIX システムの **man syslog.conf** および **man syslogd** コマンドを参照してください。

UNIX システム ログイング ファシリティの設定

外部装置にシステム ログ メッセージを送信する場合、あらゆる UNIX Syslog ファシリティから発信されたメッセージを WMIC に識別させることができます。

UNIX システム ファシリティ メッセージ ログイングを設定するには、イネーブル EXEC モードで次の手順に従います。

	コマンド	目的
ステップ 1	configure terminal	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	logging host	対応する IP アドレスを入力することによって、UNIX Syslog サーバ ホストにメッセージを記録します。 ログイング メッセージを受信する Syslog サーバのリストを作成するには、このコマンドを繰り返し入力します。
ステップ 3	logging trap level	Syslog サーバに記録するメッセージを制限します。 デフォルトでは、Syslog サーバは informational およびより低い数値のレベルのメッセージを受信します。level キーワードについては、 表 17-3 (P.17-8) を参照してください。
ステップ 4	logging facility facility-type	Syslog ファシリティを設定します。facility-type キーワードについては、 表 17-4 (P.17-12) を参照してください。 デフォルトは local7 です。
ステップ 5	end	イネーブル EXEC モードに戻ります。
ステップ 6	show running-config	設定を確認します。
ステップ 7	copy running-config startup-config	(任意) コンフィギュレーション ファイルに設定を保存します。

Syslog サーバを削除するには、**no logging host** グローバル コンフィギュレーション コマンドを使用し、Syslog サーバの IP アドレスを指定します。Syslog サーバへのログイングをディセーブルにするには、**no logging trap** グローバル コンフィギュレーション コマンドを入力します。

[表 17-4](#)に、Cisco IOS ソフトウェアがサポートする 4.3 BSD UNIX システム ファシリティを示します。各ファシリティの詳細については、使用している UNIX オペレーティング システムのオペレータ マニュアルを参照してください。

表 17-4 ログ ファシリティ タイプ キーワード

ファシリティ タイプ キーワード	説明
auth	認可システム
cron	クローン ファシリティ
daemon	システム デーモン
kern	カーネル
local0～7	ローカル定義のメッセージ
lpr	ライン プリンタ システム
mail	メール システム
news	USENET ニュース
sys9	システム用
sys10	システム用
sys11	システム用
sys12	システム用
sys13	システム用
sys14	システム用
syslog	システム ログ
user	ユーザ プロセス
uucp	UNIX-to-UNIX Copy システム

ログ設定の表示

現在のログ設定およびログ バッファの内容を表示するには、**show logging** イネーブル EXEC コマンドを使用します。出力の各フィールドについては、『*Cisco IOS Configuration Fundamentals Command Reference for Release 12.2*』を参照してください。

ログ ヒストリ ファイルを表示するには、**show logging history** イネーブル EXEC コマンドを使用します。